

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの50年-』No.6

今週のキーワード! スポーツ
オリンピック開催地への道は?

今は昔、「東洋の魔女」こと全日本女子バレーボールチームがソ連(当時)を破り金メダルを獲得した東京オリンピック。この試合のテレビ視聴率 66.8%は今なお破られていません。先日行われたサッカーワールドカップの日本対パラグアイ戦でさえ 57.3%でしたので、そのときの熱狂振りが伺えるというものです。

その沸きに沸いた東京オリンピック女子バレーボール競技開催の裏には、インドでの秘話というべきものがありました。『インド私録』に書かれているアジア予選の準備のための予選参加国代表会議での韓国と北朝鮮の問題がそれです。予選は、開催国として出場権がある日本以外にあと1カ国を選ぶためのものでしたが、もう1つ重大な側面がありました。それはこの予選で、韓国と北朝鮮が朝鮮半島の分断以来、初めて国際試合で顔を合わせるということ。最初から波乱が予想された会議は案の定、国名の呼称の議題で、両国はともに相手が正式国名を使用することに反対したため、膠着状態に。それならと日本の前田代表が「南鮮、北鮮でいきましよう」と提案。武藤氏がそ

れを忠実に「South Korea」と「North Korea」と英訳したところ両国代表から「そんな国はない」と轟々の非難を浴びます。発言の主である前田代表がどのような様子だったかという、「堂々たるものでしたねえ」(武藤氏)。前田氏はその後、メキシコオリンピックで実施競技からはずされたバレーボールをその年の国際オリンピック委員会(IOC)に諮り復活させています。特攻隊員として終戦を迎えた経歴を持つだけに肝の据わった人物だったようです。

東京五輪でインドのメダル獲得はホッケーでの金1つだけでした。あれから44年たった北京五輪でも金1つと銅2つの計3個。スポーツがいま一つ国民の関心と呼んでいないようです。では、インドでオリンピックが開かれる可能性はあるのでしょうか。武藤氏は、今のような経済発展が続いて、政治が安定していれば十分ありうると見えています。開催地はアジア大会が2回開催され、今年10月に英連邦競技会が行われるデリーが有力とのこと。

外交とは個人プレーのモザイク

第三国独自の情報網も活用

前述の会議で激しく日本側に抗議した韓国と北朝鮮の代表も、

会議後にそれぞれ前田代表と武藤氏に日本語で非礼を詫びています。武藤氏は北朝鮮とは国交の関係で関わりを持っていませんでしたが、韓国領事館員とは日頃から麻雀をするなど親交を深め、当時のソ連や旧共産圏の外交官ともよしみを通じていたと語っています。

「外交は個人プレーのモザイク」と武藤氏は語ります。各国から来ている外交官には独自の情報網があり、アンテナを張り巡らしていれば本来得られない情報も手に入ります。しかし、それは国益を背負う外交官とよほどの信頼関係がなければ不可能。そのためどこまで何をするかはその外交官のやる気と才覚にかかっています。まさに「個人プレー」です。外交官一人一人のプレーがモザイクのように組み合わせられたとき、国益をもたらす外交成果が得られるのです。

ところで、武藤氏自身の個人プレーの詳細はどんなものだったのでしょうか。具体的なことについては語らないほうがよいでしょうと言いつつ、運転する車で追っ手を振り切るなど、映画のような場面もあったとのこと!

ラジオ・ニュームンバイか
らのお知らせ



第8回放送は7月20日です。